合掌造り住宅の変遷

合掌造りの家は、少なくとも 18 世紀初頭から 1950 年代までの約 250 年間、白川郷や五箇山に建設された。屋根は一貫して象徴的な三角形の形を保っていたが、家屋は時代とともにさまざまな面で著しく変化をしていった。

その一例が間取りの変遷である。当館に現存する最古の家屋である 1700 年代半ばに建てられた旧山下陽郎邸住宅と、それ以降の家屋の大きな違いは、床の間を含む客間が付いていることである。このような部屋が白川で採用されたのは、1800 年代後半のことである。部屋には専用の入り口があり、重要な客人を迎えるのに使われた。その例は和田家住宅に見られ、和田家ではしばしば高位の来客や、官職にある武士を迎えていた。
さらに、初期の家屋は「オエ」と呼ばれる中央の大きな部屋を中心に、そこで家族が料理や食事、日常生活の大半を過ごしていたのに対し、その後の家屋はより多くの小さな個室に分けられている。また、縁側がある家も多い。

1854 年の開港後、拡大する絹貿易に対応するため、家屋はさらに変化した。白川郷の住民は、養蚕業を拡大するために温度調節のできる作業場が必要であり、そのためには屋根裏部屋を広くする必要があった。そのため、後世の合掌造りの家屋には鉄砲梁（両端が緩やかなカーブを描く太い梁）が用いられた。鉄砲梁は大きな屋根裏部屋を支えることができ、また軒の高さを高くすることができるため、豪雪地帯では有利であった。

合掌造りの家屋の骨組みは村外から来た専門の大工が作ったが、鉄砲梁の使用は村人と大工が一緒になって地元で考案したものと考えられている。